助っ人

Type510

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
助っ人

【Ｎコード】
Ｎ２３２７Ｙ

【作者名】
Ｔｙｐｅ５１０

【あらすじ】
碇シンジが、サードインパクト後から時間を逆行し、狩威シンゴという別の人物として、“助っ人”という立場で未来を変えていく。

第一の布石

「碇ユイさんに会いたくはありませんか？」
碇ゲンドウは驚愕した。突然目の前に“出現”した男に。そして、その男の口から放たれた一言に。

助っ人　第１話　第１の布石

ここは特務機関ＮＥＲＶ　総司令執務室。誰にも気付かれずに潜入することは不可能に近い。それに、男が言った言葉は、彼は自分たちの計画を知っている可能性が高いことを示していた。男の身長は１８０センチ前後、声や体格から、若者であることはわかった。ジーンズに黒いパーカーを着ているが、フードを被ってやや下を向いているため、顔ははっきりとはわからない。しかし、ただものではない。そう思いゲンドウは焦ったが、数秒で冷静さを取り戻し男に訊ねた。
「誰だ、貴様は」
「僕の問いに答えて下さい。碇ユイさんに会いたくはありませんか？」
「ああ。だが、今はまだ不可能「いえ、僕なら会わせてあげる事ができますよ。正確には“初号機の中からユイさんをサルベージすることができる”ですね。まあ、僕が出すいくつかの要求を呑んでいただければ、ですがね」
ゲンドウの言葉を遮るように、男はフードを取りながら言った。
「！！」
やはり、ただものではなかった。彼の瞳と髪は、銀色に輝いていた。彼は何らかの“力”を使ってこの部屋に侵入し、その“力”でもってユイをサルベージすることができるのではないか、ゲンドウは直感的にそう思った。彼に絆を求める蒼い髪の少女の存在がそう思わ

せたのだろう。
「…要求は何だ？」
「僕を信用して下さるんですね？要求についてですが、まだ言えません。ユイさんをサルベージした後にお伝えします。あなたとユイさんを引き裂くような要求はしないことを約束しますから、心配する必要はありませんよ。」
男の答えは予想外のものだった。ユイを連れ戻すことで、彼に何かメリットがあるのだろうか？彼の目的は何なのか？気になることはいくつか有ったが、何故か“彼が約束を破るのではないか”という懸念を抱くことはなく、ゲンドウ自信もそれを不思議に思った。理由はわからないが、彼は信じることができた。
ユイが帰ってくる、突然訪れた幸福にゲンドウの表情も緩む。ふと、そんな彼の脳裏に、一人の少年が浮かび上がった。彼は男に言った。
「シンジが…私の息子が不幸になるような要求も出さないと約束してくれ」
「もちろんです」
男は微笑みながら答えた。そして、今度は男が口を開いた。
「そういえば、あなたの問いに答えていませんでしたね。僕は狩威（かりい）シンゴと申します。歳は１８です」
「狩威くん、か…君は何を知っている？」
ゲンドウは、狩威に対して聞きたいことは沢山あったが、とりあえず一つ質問してみた。
「そうですね…あなた方の計画や、ゼーレの人類補完計画、死海文書と裏死海文書、綾波レイの正体、あなたと赤木親子との関係は知っています。あなたが知りたかったのは僕がこれらについて知っているか、ということでしょう？」
「そうか…」
やはり、彼は全て知っていた。
「？…あなたにとっては拙いことでは無いんですか？」

「ユイは君がサルベージしてくれるのだろう？もはや私の計画は必要なくなった」
「こんな事を言うのは悪いですが、まさかあなたがこんなに人を信用するとは思っていませんでしたよ。ユイさんをサルベージして信用してもらってから要求をお伝えしようと思っていましたが、その必要は無さそうですね」
彼の要求は次のようなものだった。
・自分を司令部所属の職員としてネルフに置くこと
・綾波レイの素体の処理を自分に任せること
・ダミープラグの開発中止
そして…
「最後に、ユイさんと共に碇シンジと綾波レイに“親”として接し、彼らを育てる事です」
「分かった。要求を呑もう。しかし…」
「なんです？」
「君の目的は何だ？」
「ゼーレの討伐、ゼーレやネルフによって残酷な運命を辿るように仕組まれた人達を救うこと、そして使徒を本能から解放することです。
「！？…使徒の本能からの解放だと？どうするというのだ？」
「使徒はアダムを求める本能に縛られています。彼らをその呪縛から解き放ち、人間社会で暮らせるようにしてあげたいと思っているんです。ゼーレの討伐も彼らに手伝ってもらえますしね」
我々とは考えることの大きさが違う、ゲンドウはそう思った。
「サルベージについてですが、明日の２３時から行おうと思います。立会人はあなたと冬月コウゾウ副指令、赤城リツコ博士、葛城ミサト一尉の４名のみでお願いします。それ以上でもそれ以下冬月副指令は今はいらっしゃらないようですが、彼には僕の事を話しておいてください。赤木博士にサルベージを行うことを事前に伝えるかどうかはお任せします。」

「しかし…赤城博士は…「僕にも考えがあるので、なんとかお願いできないでしょうか？万が一、赤木博士がユイさんを排除しようとしてもユイさんに危害が加わらないようにしますから」
「…分かった。そのように手配する」
「ありがとうございます。では僕はこれで失礼します」
「ああ」
シンゴは別の空間に繋がるような黒い穴を展開した。もはや驚く事もあるまい、とゲンドウは椅子に座りなおし、机に肘をついて顔の前で手を組んだが、重要なことを聞くのを忘れていたので、慌てて立ち上がって帰ろうとしているシンゴに叫んだ。
「ま、まってくれ！ユイをサルベージしたら、初号機の運用はどうするのだ？」
「あ…そういえばそのことを説明するのを忘れてました」
彼は苦笑いしながら言った。
「初号機はサルベージと同時にシンジくんが乗れる状態にしておきます。彼を戦いに巻き込むのは心苦しいですが、ゼーレのことを考えると僕が代わるわけにもいきませんので…」
「そうか、分かった」
「では、今度こそ失礼します」
――

第三新東京市　郊外
黒い穴が現れ、中からシンゴが現れる。
「ふぅ、とりあえず最初の布石は済んだ。絶対にあの紅い世界にはさせない！そのために還ってきたんだ」
彼はそうつぶやいた。
狩威シンゴ、彼の正体は、サードインパクト後から未来を変えるために還ってきた“元”碇シンジである。“助っ人”として影で動

く彼に未来を変えることはできるのだろうか。

第一の布石（後書き）

初めて投稿させていただきます。物語と設定が混ざったような文章になってしまい、読みにくくなってしまいました。また、表現が適切でない部分があるかもしれません。駄文ですが、読んでいただけると嬉しいです。

サルベージ（前書き）

今回は、原作とは異なる独自の設定、解釈が含まれています。

サルベージ

―初号機ケイジ―

時刻は１１時４５分をまわった。ゲンドウの召集によって赤城リツコと葛城ミサトがやってきていた。

「指令、ご用件はなんでしょうか？」

「ユイをサルベージする。」

「！？」

リツコは言葉を失った。

「助っ人」第二話　サルベージ

リツコは考えていた。サルベージは不可能ではなかったのか？ゲンドウの計画の目的が碇ユイとの再会だったのだから“可能だがやらなかった”ということはないだろう。最終的に、サルベージの方法が見つかったという結論にたどり着いたので、ゲンドウに質問した。

「どのようにしてサルベージを行うのですか？現時点では不可能だったはずですが」

「それは私が説明しよう」

リツコの問いに対し、ゲンドウの横に立っていた冬月コウゾウが言った。

「サルベージを可能にする“力”を持った者が現れて、条件付きでサルベージをすると言ってきたそうだ。私　はその場に居合わせなかったが、碇の話だと、もうすぐ到着するらしい。ちなみに、この４人の立会いも条件の　うちだそうだよ。」

「！？」

リツコは再び言葉を失った。

「ねえねえリツコ、さっきから何の話をしているのかさっぱり分

からないんだけど…。ユイさんって誰なの？　サルベージって、どこから引き上げるのよ…」
ネルフについてあまり深くは知らないミサトはリツコに問い掛けた。
「それについては僕が後ほどお教えしましょう」
突然背後から声が聞こえ、ミサトは銃を抜いてふりかえり叫んだ。
「誰なのっ！」
向きを変えたにもかかわらず、再び背後から声が聞こえた。
「ただいまご紹介に与りました、“力”を持つ者です」
冬月とリツコ、そしてふりかえったミサトは驚愕した。そこに突然現れた銀髪銀眼の青年に。
「き、君が狩威シンゴくんかね？」
腰を抜かしかけた冬月がシンゴにたずねた。
「はい、そうです。すみません、少し驚かせてしまったようですね。約束の時間も近いですし、早速サルベー　ジを始めます。なにか着る物は用意してありますか？」
「ああ、白衣と移動式の簡易ベッドを用意してある」
「流石、用意周到ですね。では、指令は僕の横に立ってサルベージされたユイさんを受け止めてください」
「わかった」
「では、始めます」
そう言うと、シンゴは初号機手をかざすように伸ばした。すると、初号機の鳩尾のあたりの装甲が中央に吸い込まれるように消え、剥き出しになったコアから光り輝く球体が出てきた。シンゴが手をゲンドウの方へ向けると、球体もそれに合わせて移動し、ゲンドウの前に来た。そして球体は女性の姿へと形を変えた。
「ユイっ！」
ゲンドウはユイを白衣で包むと、ベッドへ移動させた。彼女が眠ったままなので心配そうな顔をしていた。
「目覚めるまでにはもう少し時間がかかります。ユイさんが目覚めるまでそばにいてあげて下さい」

シンゴがそう言うと、彼は一言、
「本当にありがとう」
と言った。シンゴは微笑で返した。ゲンドウはユイのベッドを押して、病室へと向かった。
「しかし、どうやってサルベージしたのかね？」
冬月は、まさに皆の疑問を代弁した質問をした。
「それを説明するには、まず、なぜエヴァに取り込まれてしまうかを説明しなければなりません」
「エヴァに魂が無いから、ではないの？」
リツコが問いかける。
「ええ。９割正解というところでしょうか。実はエヴァは小さいですが、魂を持っているんです。ただ、取り込　まれてしまうことからも分かる通り、自我は無く、魂と呼べるかどうかも微妙なものです。つまり、コアの中　はユイさんが取り込まれるまでほとんど空っぽだったというわけです」
「なるほど…」
「次に、サルベージについてですが、実行する上で重要なのは、この“魂を持っている”ということなんで　す」
「それはなぜかしら？」
「この魂に知識と感情を与え、魂の成長を促すんです。自我が確立してしまえば、魂は急成長します。なんせ　エヴァですからね、成長スピードは人間の比じゃないんですよ」
「そしてエヴァ自身の魂でコアを満たし、取り込まれたユイさんをサルベージした、というわけね」
「そうです。さすが赤城博士ですね」
説明を聞き終えた冬月は納得した顔でケージを出ていった。おそらく、ユイのいる病室へむかったのだろう。
「ところで、なぜ私とミサトの立会いを求めたの？」
「そうよ、何か知ってるらしいリツコはともかく、なんで私まで？」

本当にこの青年の考えには疑問が多い、リツコはそう思いながらミサトと共にシンゴにたずねた。
「お二人にもお話したいことがあったので立ち会ってもらいました。特に葛城三佐にはサルベージを見てもら　った方が話がスムーズに進むと思ったので」
「じゃあ、その話とやらを聞かせてもらおうかしら？」
「ここで話すのもなんなので、場所を変えましょう」
三人はケージを後にした。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

サルベージ（後書き）

投稿が遅くなりました。すみません。
今回は、独自設定の部分で、人によって好き嫌いが分かれる話になったと思いますが、どうでしょうか？これからも今回のような独自の設定を入れていこうと思っています。
ストックが無いので、書け次第投稿という形で不定期更新とさせていただきます。
これからも読んでいただけると嬉しいです。

Ｔｙｐｅ５１０

第二の布石（前書き）

今回もオリジナル設定が入っています。

第二の布石

ー赤城リツコの研究室ー

リツコ、ミサト、シンゴの三人は、話をするためにこの部屋に来ていた。

「で、監視や盗聴の危険が無い部屋がここですか…」

「そうよ。なにか文句あるかしら？」

「いえ、ただ、インテリアが猫だらけだなぁと思って。猫、お好きなんですか？」

「ええ、家で3匹飼っているわ」

「そうですか…。では本題に移ります。まず、葛城一尉。あなたは復讐する相手を間違えています」

「なんですって！？」

セカンドインパクトから今まで、使徒を倒して父親の仇をとるために生きてきたようなものであるミサトにとって、その一言はショックだった。

「じゃあ…じゃあ私は誰に復讐すればいいのよ！教えなさいよ！」

ミサトは、半泣きになりながらシンゴに叫んだ。

「葛城一尉、落ち着いてください！」

「ミサト！彼に当たってもどうにもならないわよ！」

「……」

「葛城一尉、あなたが復讐するなら相手は、”ゼーレ”という組織です」

「…ゼーレ…？」

「そうです。ここ、ネルフの上位組織です。ゼーレの目的は人類補完計画…一人では生きて行けない人間の魂をまとめて使徒のような単体生物に人工進化させることです」

「そんな…人間って支えあって生きていくものでしょ！そんなのおかしいわよ！狂ってるわ！」

「僕もそう思います。ただ、多くの人の意見を無視しているとはいえ、いずれ訪れるであろう人類の滅亡を阻止できるのは事実ですから、僕はこれだけでは良い事か悪い事かは判断しかねます」
「これだけ…ってことは…」
「ええ、彼らにはもう一つの企みがあります。というより、こちらが本当の目的です。彼らは補完された人類から抜け出して神のような存在になろうとしています」
「許せないわね…でも、そんなことができるの？」
「できません。彼らが“自分たちは特別な存在だからできる”と思い込んでいるだけです。しかし、彼らは強引に行おうとするでしょう。そうなれば、人類補完計画も不完全に行われ、人類滅亡…という事になってしまいます」
「…ひどい話ね…でも、それと私の復讐とどんな関係があるの？」
「あなたのお父さん、葛城ヒデアキ教授はゼーレの裏の計画の一部を知っていたんです。ゼーレは彼が計画の邪魔になると思い、消したんです。彼が南極で行っていた第一使徒アダムをコントロールする実験が失敗して、セカンドインパクトが起こることを知りながら、それを推して」
「私の父は裏の計画を潰すために実験をしていたの？」
「それは分かりかねます。ただ、セカンドインパクトでアダムの覚醒が遅れたんです。そして、旧東京に現れＮ２爆雷で弱らせられた第二使徒リリスが回復し、アダムに似た波動で使徒を引き寄せるようになるのが１５年後、丁度今年だと予測されました。その１５年間でジオフロントにリリスを置いて要塞都市を構築し、使徒を迎撃する計画ができました。そのことから、アダムをコントロールして覚醒を阻止しようとしたんじゃないかと思います」
「そう…結局、セカンドインパクトは私の父の手で起こされたのね…」
「…そうなりますね」
「なんだか、誰に復讐したらいいのか分からなくなってきたわ」

そう言ってミサトはため息をついた。
「だったら、復讐なんてやめましょう。ほら、よく言うじゃないですか。“復讐からは何も生まれない”って」
「そうね、それがいいのかもしれないわ」
「最後に決めるのは、葛城一尉、あなた自身です。じっくり考えて答えを出して下さい」
ミサトは深く頷くと、部屋を出て行った。
「お待たせしました、赤城博士。何を聞かれるかお分かりですか？」
「指令とのことかしら？」
「正解です。で、どうするおつもりですか？」
突然、リツコはポケットに入っていた銃を抜きシンゴの眉間に突きつけた。だが、引き金を引こうとした時には銃は木端微塵に砕け散っていた。
「…憎い、憎いわ。あなたも、碇指令も…」
リツコは泣き崩れた。
「あの人は私を利用する事しかしなかった。私は本当に愛していたのに…」
「嘘ですね」
「え？」
「さっき自分で言ったじゃないですか。“憎い”って。愛と憎しみって本当に紙一重なんですね…」
「！！…そう、私はあの人のことを憎んでいたのね…」
「それに、母親を超えるために利用していたんじゃないですか？女としての赤城ナオコ博士を超えるために」
「…本当、ひどい女ね、私って。」
リツコは机の上の睡眠薬の蓋を開けてすべて飲もうとした。
「死ぬ気ですか？」
「ええ、もう私に価値なんてないわ」
「いい加減にしろ！！そんな事、赤城ナオコを越えなければ価値

がないなんて事、誰が決めたんだよ！！あんたを必要としている人はたくさんいるんだ、オペレーターや技術部員はあんたを信頼して今までついてきたんじゃないのか！勝手に死ぬなんて言うな！」
　リツコは初めて感情的になったシンゴに対する驚きと、彼から発せられるプレッシャーでその場に崩れ落ちた。
「すみません、取り乱しました。赤城博士、まだ遅くないです、やり直すチャンスはあると思いますよ」
「…そうかしら…そうかもしれないわね」
「ええ。あなたの場合は葛城一尉のように自分で答えを出されては困ります。生きてください、そしてあなたの命はあなただけのものじゃないという事を忘れないで下さい」
「分かったわ。フフッ、まさかこんな事で１８歳の子に説教されるとは思わなかったわ」
「良かったです。生きる希望を見つけてもらえて。あなたの笑顔、初めてみましたよ。やっぱりまだ、遅くないです」
「へ？」
リツコは一瞬きょとんとしたが、意味が分かると顔を赤らめてうつむいた。
「あなたにお似合いの人、探しておきますよ」
そう言ってシンゴは、にやけ顔のまま扉の向こうに消えた。
「お願いするわ」
リツコは彼が出て行った扉に向かって呟いた。彼女の顔はこれまでになく晴々としていた。

ーネルフ付属病院前ー
「二つ目の布石も敷いた。後は、綾波か…」
シンゴはそう呟くと、病院へと入っていった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第二の布石（後書き）

今回もオリジナル設定が入っていますが…考えれば考えるほど矛盾する部分が出てきて大変でした。あまりうまく纏められなくてカギカッコばかりになってしまっています。すみません。読みにくいかもしれませんが、今回もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2327y/

助っ人

2011年12月27日00時48分発行